

通訳者とコミュニケーション

森 住 史

Interpretation is more like painting than photography.

通訳を例えるならば、写真というより絵画のようなものだ。

Danica Seleskovitch, 1978: 18.

1. はじめに

通訳という行為は、二言語を流暢に話せる個人がその言語スキルを駆使して言語Aから言語Bに次から次に訳をしていくもの、というのが一般的なイメージであろう。そして、そこで通訳者に求められる役割は、オリジナルの話し手のメッセージのチャンネルとしての機能であり、それ以上にコミュニケーションに積極的に関与することは想像されていないか、あるいは好ましくないとされていることが普通である。しかしながら、通訳を“verbal transfer”（言語上の移行行為）として捉える見方は、もっとも“primitive”（原始的）なものである（Chesterman 1997: 20, Pöchhacker 2004: 54 に引用）。実際に通訳者としての経験がある者ならば承知しているように、言語スキルを駆使して訳のアウトプットをする、という部分は、通訳行為のごく一部しか表していない。実際の通訳行為は、話者の言わんとするところ、つまりはメッセージの全体を十分に理解し、話者の意図や聴衆の期待などに沿ってそのメッセージを分析した上で、それを対象言語ならびにその言語文化のルールにのっとって再表現する、という、通訳者が積極的に関わる3段階のステップを経て遂行される。聞いて意図を理解し、更にそれを聞き手に合わせて表現するという側面は、非常に込み入ったコミュニケーション行為である。通訳とは verbal transfer に終わらない統合的なコミュニケーション行為である、という捉え方は、現場の通訳者であれば日々実感していることであるが、この論文ではそれを通訳理論から確認していく。以下、まず最初にコミュニケーションとしての通訳行為の「理解」の部分に通訳者がどのように関わるのかに焦点を当て、実際に訳出を始める前のこのステップがいかに通訳のパフォーマンスに影響を与えるかを論じ、続いて、通訳者が介在するコミュニケーションにおいて通訳者に期待される役割が実際にはどのようなものであるのかを検証する。

2. 通訳行為の3ステップ

通訳者以外の者が触れる通訳行為、つまりは、聴衆の耳から聞こえる通訳というのは、いわゆるアウトプットの部分だけである。例えば、オバマ米大統領のスピーチが日本語に訳されたのをテレビニュースで聞くのであればその日本語になったスピーチ。あるいは企業のIRミーティングにおいてオーストラリアの投資銀行から来たオーストラリア人のために、日本語で説明された企業情報が英語に訳されたらばその英語での説明。それらを多くの人は「通訳者の仕事」として認識する。つまり、その通訳時の目的言語 (target language = TL) である日本語や英語でのアウトプットをもって、「この通訳は分かりやすい」「この通訳者は上手だ」「この通訳者は下手だ」と、人はプロダクトとしての通訳と通訳者の腕を評価する。しかし、実はこのアウトプットに至るずっと前から、通訳者は積極的に、そして貪欲に、その場で起こっているコミュニケーションに関わっているのである。

通訳学の基礎を築いた通訳者でもありパリ第3大学通訳翻訳高等学院 (Ecole Supérieure d'Interprètes et de Traducteurs、通称 ESIT) を創立した Danica Seleskovitch は、通訳のプロセスを以下の3つに分けている (1978: 8)¹:

1. 意味を持った発言を耳で聞いて認識する。そして分析と解釈により、言語を理解し、更にメッセージを理解すること
2. 使われた特定の語句は即座に意識的に不要なものとして破棄し、そこにある概念やアイデアといったメッセージを mental representation (言語化されていない思考の表現) として記憶にとどめること
3. 目的言語での新しい発言として作り出すこと。その際、2つの条件を満たさねばならない: オリジナルのメッセージを何も欠くことなく表現できていることと、メッセージの受け取り手にあわせて作られていること

以上をまとめると、オリジナルの発話を耳で聞いてその場で理解するのが第一ステップ、聞いたメッセージを非言語化した mental representation として記憶することが第二のステップ、そして口から訳出した言語メッセージを出すことが第三のステップである。Seleskovitch 自身はこれを triangular process (三角のプロセス) と呼んでいる。

... [i]nterpretation is a triangular process and not simply a linear process of transfer from one language to another. The language is perceived (perception stage), reduced to meaning (comprehension stage), and finally expressed in another linguistic form (expression stage).

(Seleskovitch 1978: 37)

通訳は三角形をしたプロセスであり、ある言語から別の言語への単なる直線方向の移行というものではない。発せられた言語はまず言語情報として理解され (perception としての理解の段階)、次にそれが意味に凝縮され (comprehension としての理解の段階)、そして最後に別の言語形態をとって表現される (表現の段階)。

やはり自身が一流の通訳者であり通訳学者である Roderick Jones も、通訳行為 (特に逐次通訳において) を、understanding (理解)、analyzing (分析)、re-expressing (再表現) の three basic stages (3つの基本的な段階) に分けている (Jones 2002: 11)。Jones が提唱したこの3つの段階は、それぞれ Seleskovitch が提示した通訳プロセスの3つの段階と 100% 重なるわけではないが、しかし、Seleskovitch と Jones がそれぞれ通訳行為を三段階に分けていることは興味深く、また理にかなったものであると言えよう。両者が提唱する通訳プロセスの三段階を改めてまとめると、以下のようになる。

- a. 言語テキストを聞いて内容と意図を理解する
- b. 理解したものを改めて整理分析する
- c. b を、target language (TL) で意味をなすメッセージとして再構築・再表現する。

通訳者の仕事として一般人が見聞きして捉えている部分は、通訳行為の3段階のうちの最後の部分のみである。だとすれば、彼らにとっては、そもそもそれがなければ通訳のしようがない「聞いた言語メッセージを理解する」第一段階の部分も、第2段階の「言語的理解を分析してメッセージとして解釈したうえで記憶する」部分も、一種のブラック・ボックスの中の出来事であるということが言える。更には、そのブラックボックスで何が起きているのかについて、聞き手 (あるいはクライアント) である一般聴衆は関心を払っていない状態であるということも言えるであろう。

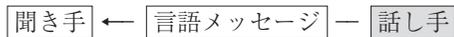
3. コミュニケーション行為としての通訳

上で述べたように、通訳行為には「聞いて理解する」ところから「理解した内容を非言語化して記憶する」「そのメッセージを聞き手のために自身の口から発する」という3段階が含まれている。このことは、また、通訳者が非常にインテンシブなコミュニケーション行為に積極的に関わっているということでもある。

最も単純化されたコミュニケーションモデルを考えてみよう。



聞き手は言語メッセージを聞き、それを自分の経験や常識、知識、話し手についての知識や期待に照らし合わせて、分析し、解釈し、理解する。そして、場合によっては、その理解に基づき、今度は聞き手が話し手となる。



通訳者は、逐次通訳をしている時であれば、聞き手と話し手の役割を数秒から数分で交互にこなす、同時通訳をしている時であれば、常に聞き手であり話し手である状態を維持しなくてはならない。しかし、いずれにしても、「聞く」という行為が通訳の出発点であることには変わりがない。

聞き手である際の重要なポイントは、聞いた言語メッセージを「理解する」ことである、というのは Seleskovitch も Jones も明記した通りである。では、通訳者が「理解する」とはどういうことなのかを次に述べていく。

3.1 コミュニケーションを成り立たせるための理解

コミュニケーションの聞き手が聞いたことを理解するには、まず auditory input (聞こえてくる音) を意味のある言語単位として捉えられなくてはならない。日本語を聞いてもその意味を分らないが非常に「耳の良い」人がいたとして、次のスピーチを聞いたらどのように捉えるのかを想像して欲しい。

まずは電力改革。東京都の施設に新電力を導入する。これ、今までやってきたことですが、それを徹底的にやるということです。

(2013年8月18日、猪瀬東京都知事の定例会見での発言より)

おそらく、このような単なる「音の羅列」にしか聞こえないであろう：

mazuwaden'ryokukaikaku

tokyotonoshisetsunishin'den'ryokuo donyusuru

kore imamadeyattekitakotodesuga soreotetteitekiniyarutoyukotodesu

当然、上記のような「音」は、たとえ聞きとれたとしても日本語理解力を持たない人にとっては、何の意味もなさない。音が聞きとれるということが必ずしも理解に通じないということは、この一

例からも明らかである。耳にした音を意味のある言語として理解するには、まずその言語を知っている必要がある。知らない単語がたとえ耳に入ってきたとしても、それが「金融関連の用語である」「嫌悪感を表す形容詞である」というくらいの理解ができなくてはならない。そのためにも、通訳者は自分の native language でない方の言語、つまり passive language においても、十分な知識を持っていないといけない (Jones 2002: 12)。

しかし、言語知識だけでは通訳をするに足る理解 (comprehension) には至らない (Jones 2002: 12) ということも忘れてはならない。“Interpreters must be able to seize meaning in a split second, and must therefore listen constantly in an active, attentive way, always asking themselves ‘What does the speaker *mean*?’” (ibid.: 12、イタリック原文のまま)。(通訳者は、一瞬で意味をつかまなくてはならない。そのためには常に、アクティヴにかつ注意深く自らに次の質問を尋ねていなくてはならない。「この話し手は何を言おうとしているのか?」) ここで、“What does the speaker *mean*?” (この話し手は何を言おうとしているのか?) と表現が大きな意味を持つ。「何を言っているのか」ではなく、「何を言おうとしているのか」という、言語化されたメッセージの裏にあるもの、つまり話し手が伝えたいメッセージを、通訳者は表層の言語メッセージを聞きながら同時に捉えていく必要があるのである。

実際、我々は日常のコミュニケーションの中で、特に意識せずともこのような聞き方、つまり、「この人はいったい何を伝えようとしているのだろうか?」ということをつかみとろうとする聞き方をしている。でなければ、ジョークや皮肉は伝わらないし、婉曲表現も意味をなさなくなる。

こうして理解した意図、あるいは意味を、Seleskovitch はフランス語で *sense* (センス) と呼んでいる (Seleskovitch 1978)。langue (ラング: 言語そのもの) に対し、話し手が伝えようとする意味を *sense* とした Seleskovitch は、話者が使った語句にとらわれず、話者の伝えようと大意である *sense* を理解することこそ通訳者にとって重要な理解だとした (ibid.)。

3.2 理解に重要な分析・知識

聞いて理解することの重要性は、多くの通訳理論で強調されている。例えば、小松 (2005) は以下のように述べる。「通訳は聞くことから始まる。話し手が言ったことを正確に理解する—これが通訳で最も大切なことである。(中略) 理解こそ通訳の始まりであると同時に、良い通訳ができるための条件である」(ibid.: 29)。また、Seleskovitch (1978: 11) は、*Interpreting for International Conferences* の第二章、理解に関する章を次の一文で始めている。“To interpret one must first understand.” (通訳をするためには、まず理解をすることが必要である)。

以上のように、通訳者にとって「理解」が重要であることは、通訳理論における共通認識であると言える一方で、通訳者にとって理解するというとはどのようなプロセスなのか、何を理解すれば理解したといえるのか、という点については、分かりやすい簡潔な定義は難しい。以下、「理解」の内容や定義がどのように通訳理論で扱われてきているかを概観する。

本論の pp.2-3 にかけて提示した Seleskovitch による通訳の triangular process の概念では (Seleskovitch 1978)、聞いて理解する perception の段階と、その情報を更に自分で分析した後に至る理解にあたる comprehension の段階を分けてあるが、日本語では perception も comprehension も「理解」としか表現のしようがない。しかし、Seleskovitch としては、comprehension までに至って初めて通訳するに足る理解になるという見解を *Interpreting for International Conferences* を通して伝えていと読めることから、comprehension に至った時点で「理解をした」ということになるのであろうと言える。

Seleskovitch はまた、通訳者が理解をした後にその理解したものを再表現するプロセスは、人が日々の生活の中で思考する時のプロセスと根本的には変わらない、とも述べる。つまり、人間はみな無限のアイデアを保持し、処理し、頭の中に留めるわけだが、その際、それらの作業は非言語化された状況で (non-verbally) 行われている。そして、通訳者もまた、理解した内容を non-verbal な状態で自分のものとするのである (Seleskovitch 1978)。

non-verbal な状態での理解というのは Seleskovitch の著書に繰り返し出てくる重要な考えであり、“not words” (単語や言葉でなく) “detached from words” (単語や言葉とは離れた)、というような表現を使って説明されることもある。Seleskovitch and Lederer (2002) では déverbalisation (非言語化) と表現されるこの観念は、話者のスピーチを聞いている通訳者がどのような意味を捉えているかを説明するときにも使われており、「スピーチの進行中に、すなわち何百、何千の語が発音されていく間に、通訳者があらゆるニュアンスを捉えて把握する意味は非言語的な意味である」(ベルジュロ伊藤、鶴田、内藤、2009) とされる。

分析と非言語化まで経た理解を「理解」とするのであれば、Jones (2002) が提唱する通訳行為の三段階にあてはめた場合、understanding, analyzing and re-expressing の二段階目、analyzing を経て「理解」に至ると考えるのが妥当であろう。いささかややこしいが、そもそも通訳者が通訳できる状態になっているときはこのような分析も含めた理解ができている時である、とする Jones の主張を確認したい。まるで「自分自身がつくったスピーチであるかのように」、かつ、オリジナルの話者が伝えたいことに忠実な訳をすることがなぜ通訳者に可能なのか、という問いへの答えが以下の通りである。

The answer really lies in the understanding and analysis which have preceded the re-expression. The interpreter has understood in terms of ideas; they must therefore re-express in terms of ideas. The better their understanding and analysis, the better placed they are to express their ideas freely, using their own words while respecting the content of the original.

(Jones 2002: 36)

(なぜそのようなことが可能か、という問いへの) 答えは、再表現をする前の段階の understanding (理解) と analysis (分析) にある。通訳者はまずアイデア (考え) を理解し

(understand)、そして、次にはそのアイデアを再表現するのである。understanding (理解) と analysis (分析) がよりしっかりしたものであればあるほど、オリジナルの内容から逸れずに、かつ、自分の言葉で自由に表現できるようになる。

上記の引用の中では、understanding と analysis を別段階にしている一方で、アイデアを「理解する」という意味で understand という動詞が使われており、厳密な意味で Jones が言う understand/understanding が何を指すのかは不明瞭であるとも言える。しかし、アイデアの理解まで至ることが通訳者の口を通してのそのアイデアの再表現の前に必要である、という Jones の考えは明らかであることから、「理解する = understanding and analysing」と考えて良いであろう。

以上 Seleskovitch や Jones が定義しようとした「理解」を、よりシンプルに、equation (数式) として表現したモデルが Gile (2009) によって提唱されている。Gile はまず、理解とは様々な知識から導きだされる結果である、という主張を以下の数式で表した。

$$C = KL + ELK$$

(Gile 2009: 82)

C は comprehension (理解) を、KL は knowledge of language (言語知識) を、ELK は extralinguistic knowledge (言語外の知識) をそれぞれ指す。Gile の「理解」の定義においては、Seleskovitch と Jones の「理解」の定義やモデルよりも、よりはっきりとした形で「知識」(言語知識とそれ以外の知識) が提示される。つまり、Seleskovitch も Jones も、「理解」に至るために不可欠な知識に関してそれぞれの著書で詳しく言及しているが、よりストレートに知識を理解の要素として位置づけているのが上記の Gile のモデルであるといえる。

Gile が extralinguistic knowledge としたものの内容には、subject-related knowledge、situational knowledge、knowledge of the world (Gile 1995) の3つの種類がある。小松 (2005: 38) はそれぞれを「主題に関する知識」「状況的知識」「一般的知識」として、次のように説明する。「主題に関する知識」とは、会議のテーマやスピーチの内容などに直接関係する知識であり、経済分野であれ医療分野であれ、会議の内容の専門化が進む近年では、参加する会議の主題に関する知識が十分にない限り良い通訳はできない。「状況的知識」とは、話し手についての知識や、会議がどのタイミングで、どこで、何のために開かれるのかといったことについての知識を指す。特に重要なのは話し手についての知識で、その人がどのような立場から何を訴えたいのかが分かれば、話の内容の予想も可能である。「一般的知識」とは、常識と言い換えても良く、これもまた人の話を理解する大きな手がかりとなる。経験や年齢とともに増えていく類いの知識なので、ベテランの通訳者の技量があがるのはこの一般的知識の蓄積によるところが大きい。

知識が Gile (2009) によって重要視されていたことは以上から明らかであるが、分析に関しては

どうなのであろうか。C = LK + ELK という数式を用いつつ「理解」についての基本的な説明 (Gile 2009: 82-83) をし、理解における知識の重要性を説いた後、Gile は、100 パーセント理解するためには知識そのものだけでは十分でない側面があることや、テキストが複雑であったりまたは通常の言語的あるいは文化的スタンダードから外れている場合には、より *intense analysis* (積極的な分析) が必要である、とし、更に先述の数式化されたモデルを改良した版を提示する。

In order to account more fully for comprehension, the basic comprehension 'equation' requires another element besides knowledge of language and extralinguistic knowledge, namely *deliberate analysis*:

$$C = KL + ELK + A$$

(Gile 2009: 84、イタリック原文のまま)

理解というものがどのようなものか、より詳しく説明するには、この基本の「数式」に、言語的知識と言語外知識に加えてもう一つ、「意図的な分析」といえる別の要素が必要である。

理解 = 言語的知識 + 言語外知識 + 分析

上記の Gile のモデルからは、分析までを理解に含めるという考えが明瞭であり、Seleskovitch や Jones が、通訳者にとって理解するという事は情報の分析まで含む、としてきたことをここでも確認できる。

分析までを含む理解とは何か、ということの説明する例として、Gile はあるインターナショナル・スクールでのスペイン人の教師による英語の発話を挙げている (Gile 2009: 83-84)。英語が不得手なこのスペイン人教師は、教室に入ってくるとまずこう言ったそうだ。“Every people at home?” この教師が、クラスの生徒が全員出席であるかどうかを尋ねているのであるということ、生徒たちは直には理解できなかった。なぜならば、使われている単語も標準的英語話者が使うものとは異なるし、学校にいるのにもかかわらず home という概念が提示されることに伴う混乱もあるからである。このスペイン人教師の発話は、文字通り理解しようとするれば「みなさん家にいますか？」となるが、おそらく大方の通訳者は「全員出席ですか？ 欠席者はいませんか？」と、出欠確認の意図を持った発話としての理解と訳出をするはずである。このような誤った (標準的ではない) 語彙や文構造が原因で通訳者が悩まされることは日常茶飯事であり、それでも通訳ができるのはなぜか、というと、きちんとした分析の力が身に付いているからである、と Gile はまとめている。

以上、通訳者にとっての理解とは、聞こえてきた言語情報を様々な知識に照らし合わせて分析した後の結果である、ということが、Seleskocvitch (1978)、Jones (2002)、ならびに Gile (2009) が展開した理論から確認できたと見えよう。

ただし、ここで一つ付け加えたいのが、聞いて理解した内容を更に分析した結果は、そのまま通訳者のなかで不変の知識として蓄えられるものではない、ということである。通訳者は、起点言語

(source language = SL) でのロジックや構文知識といった言語上の知識と、文脈からの知識、よくあるスピーチの展開パターンの知識、そして経験上の知識も使って、話し手のスピーチを予測していく。ベルジュロ伊藤他 (2009) は、通訳者の理解における予測の重要性を強調し、「通訳者の理解は、スピーチを聞いて分析した結果として生じるというよりは、聞きながら話し手と一緒に考え、話し手の論理の方向性を見定めて、同じ方向を見ながら、話し手が次々と言う情報が自分の予測に合うことを確認し、合わないときには、自分の予測を調整して話し手の論理から推定される目標点を逃がさないようにしていくプロセス」であると表現することが妥当であるとする (ibid.: 110)。個々の話し手の論理の持っていく方や、新たに提示された視点や事実、データ、更には話し手の感情の発露などによって、現場の通訳者の知識は常に更新されていくのである。

3.3 非言語化された理解

Seleskovitch は、理解における *déverbalisation* (非言語化) を重要な概念として提唱している (ベルジュロ伊藤他 2009)。通訳者が次々に発話されては消えていく語の意味を把握する際、その意味は非言語的な意味である、とされ、この主張はベテラン通訳者としての Seleskovitch 本人の体験から生まれた信念とも言える (ibid.)。そして、このような非言語化された理解というのは、通訳者に特殊な理解の仕方ではなく、我々が日常に思考するときに通るプロセスと根本的には変わらない (“not inherently different”)、と Seleskovitch は主張する (Seleskovitch 1987: 37)。

He uses the faculty that every human being possesses to understand an infinite number of ideas and to store them non-verbally (which has nothing to do with memorizing words or learning something by heart); he can then express thoughts and concepts in a verbal form, which appears spontaneously when voiced and vanishes just as quickly. Much of the interpreter's technique is thus based on a spontaneous mental process – the thought-language process.

(Seleskovitch 1987: 37-38)

通訳者は、非言語化された状態で無限のアイデアを理解し記憶するという、人間なら誰もが持っている能力を使う (この際の記憶とは、単語を覚えたり何かを暗記したりするのは全く異なるものである)。アイデアの理解と記憶までできたら、次に、通訳者は考えや概念を言語化して表現する。それらの考えや概念は、口に出されるのと同時に生まれてくるものであり、また、すぐに消えてしまうものである。通訳者のテクニックの多くの部分は、この、思考を言語にするという、自発的なメンタル・プロセスに基づいているのである。

非言語的な理解とはどのようなものか、故事ことわざを例にとって説明すると分かりやすいかもしれない。「覆水盆に返らず」と聞けば、大方の日本語話者は「一度起こってしまったこと、やって

しまったことは取り返しがつかない」という意味であることを瞬時に理解するだろう。その場でいちいち「お盆にあった水をこぼしたら、その水はもう元の盆の中に帰ることはない」と表面的な言語の分析をすることはまずないであろうし、ましてや、そもそもの中国の故事（一度は夫に愛想を尽かして出て行った妻が、夫が成功したのを知るや復縁を求めたのに対し、盆の水を土にこぼした夫が「この水を元に戻せたら復縁に応じて良い」と答えたが、妻がいくら水をすくって盆に戻そうとしても手ですくえたのは泥だけであつた）を知っていてこのことわざの意味をそこから推察するような人はいないであろう。

以上のような理解に基づいて日本語の「覆水盆に返らず」を英語にするときには、「盆」という単語も「水」という単語も忘れて良い。それどころか、非言語化するためには、このような特定の語は無視した方が良く、ということになる。その結果、通訳者は、「覆水盆に返らず」を耳にした後で、それを、“It is no use crying over spilt milk.”（こぼれたミルクのことを今更泣いても仕方がない）といった類似の諺をストレートな等価表現として選んで訳すことも可能であれば、“What’s done is done.”（済んだことは済んだこと）“There is nothing we can do now.”（今更何もとる手ではない）と訳すこともできる。いったん非言語化のプロセスを経た後の意味を改めて英語で再表現する、その結果が通訳者のアウトプット、つまり「訳」となる。

通訳者が通訳するにあたって必要とされる「理解」は、複雑なものを多く含むが、そこに至るまでのプロセスは何ら特殊なものではなく、我々が日常、言語情報を耳にしてそれを理解するプロセスと同じものである。ただ、通訳者の場合は、自分の理解に基づいた考えや概念をすぐにまた別の人、つまり target audience（ターゲット・オーディエンス＝話し手が自分の話を伝えたい相手、聞き手）に伝えなくてはならないという条件のもとに理解に努めるので、通訳をしている間は、Gile が deliberate analysis (2009) と呼ぶ、非常に意識的で意図的な分析をしながら話し手のスピーチを聞かなければならない。話し手と聞き手を結ぶ役割を担う通訳者は、一般に「通訳行為」として認知される訳のアウトプットをする以前に、まずは「聞く」技術と姿勢を重視して仕事に臨んでいるのである。

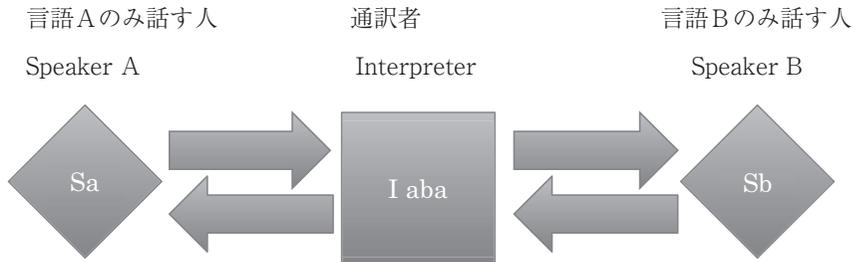
4. 通訳者の役割

通訳者が話し手と聞き手の間に入って両者のコミュニケーションを成立させている様子は、図式化も含め、様々に説明されてきた。以下、基本的なモデルを紹介し、次に、期待される役割としてどのようなものがあるのかを挙げる。

4.1 通訳モデル

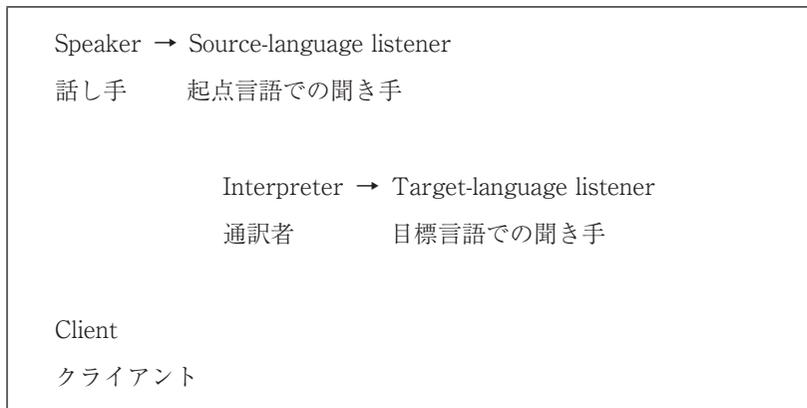
話し手と聞き手の間で、通訳者はどのような立場にあり、どのような役割を果たしているのだろうか。以下の基本的なモデルは、言語Aしか話さない話者と、言語Bしか話さない話者が、言語

Aと言語Bの両方を話す通訳者を介しコミュニケーションを成立させている例である (Anderson 1976: 211, cited in Pöchhacker 2004)。



上記の Anderson のモデルでは、共通言語を介さない話者同士のコミュニケーションにおいて、通訳者が軸となる様子が明らかになっている。

一方、実際に通訳の仕事を受けて会議通訳の現場に臨む通訳者の役割を簡単に図式化したのが Gile (1995) である。Gile のモデルでは、話し手のスピーチを通訳者を介さずに聞いて理解できる聴衆と、そうでない聴衆との両方がいた場合に、クライアントの命を受けて、通訳者が通訳目標言語 (target language) で聞きたい聴衆のために通訳をする図がまとめられている。クライアントは、実際の通訳条件 (例：通訳機材の準備、会場の手配等) などにおいて非常に重要な位置を占める (Pöchhacker 2004) のであるが、ここでは詳しい説明は割愛する。



(Gile 1995/2009)

Gile のモデルにおいては、共通言語を持たない 2 グループ (話し手と聞き手) のコミュニケーションの軸としての存在という通訳者像よりも、目標言語に依存する一定の聴衆へ話しかける存在としての通訳者像の方が目立つ。実際、国際会議などでブースに入ってヘッドフォンとマイクを使って通訳をする通訳者の姿は Gile のモデルにより近いといえるかもしれない。この Gile のモデルは、通訳者の参加する会議そのものをコミュニケーション・イベントとして捉えた場合の図式化として捉えると分かりやすいであろう。

しかし、聞いて理解する、ということが通訳行為の間中ずっと続けられている、それも高い集中力を保ったまま続けられているということを考えると、話し手だけとしての通訳者像は誤解を与える危険性がある。また、通訳者は聞いてすぐに話す（逐次通訳）ことも、聞きながら話す（同時通訳）ことも、通訳行為の間中続けているということを考えると、聞き手としての通訳者と話し手としての通訳者の両方がその場にいることを説明できなければならない。そこで、図式化することではなく、理論的な枠組みの中で通訳者を介したコミュニケーションを捉えようとしたのが Wadensjö (1998) である。

Wadensjö (1998: 88) は Goffman の participation framework (個人がある場におけるコミュニケーションにどのような役割とステータスをもって参加しているか、そしてその役割やステータスが他者との関係の中でどう変化するかという捉え方) をもとに、聞き手でもあり話し手でもある通訳者の役割を次のように表現した。

reporter (レポーター) としての聞き手：言われたことをそのまま繰り返すことのみを期待されている

recapitulator (再現者) としての聞き手：話し手の言ったことに権威を添えることを期待されている

responder (反応者) としての聞き手：ディスコースに自分なりの貢献をすることを期待されている

animator (アニメーター) としての話し手：口から出た言葉の音にのみ責任を持つ

author (作家) としての話し手：発話を作り出すことに責任を持つ

principal (本人) としての話し手：表現された意味に対しても最終的な責任を負う

通訳者は、ある一瞬は reporter として聞いていることがその役割であり、その次の瞬間には animator として言葉を発している、ということもあれば、その通訳業務の性格上、responder として話を聞き、principal として発言しなくてはならない場面にも遭遇する。以上のように、Wadensjö (1998) は、通訳行為における聞くことと話すことの同時性 (simultaneity) を強調し、上記の異なった参加者ステータスを時々で変えつつ通訳をする通訳者の立場を表現した。

4.2 期待される役割

Wadensjö (1998) によって、常に聞き手であり話し手であるという特殊な立場にある通訳者がコミュニケーションにどのような役割を持って参加しているかという観点が提示された。実際、通訳者はコミュニケーションの場に参加している話し手と聞き手にはどのような役割を期待されているのであろうか。そして、上述された「理解」は、その役割を果たすためにどのような働きをするのであろうか。

通訳行為とは、AとBの二者がコミュニケーションを必要とする場で、その間に入った個人（通訳者）が、聞くことと話すことの両方をこなしつつ、そのコミュニケーションを成立させる行為である、とし、通訳行為とはすなわちコミュニケーション行為なのである、と定義することができる（Pöchhacker 2004: 53）。その際、通訳者による通訳行為を端的に表すとすると、それは *making sense*（意味をなす話をする）ことであり、つまりは話者の言わんとするところ（*intended meaning*）を捉えてそれを別言語で聞く人のために表現しなおすことである（*ibid.*）。しかしながら、通訳者がコミュニケーションを手助けしているという考え方はあまりに当然のようでありながらも学問的には1980年代まであまり注目されてこなかった側面であることも事実である。通訳者と言えば“*the man (or woman) in the middle*”（間にたつ人）という考え方（Knapp-Potthoff and Knapp 1987）がプロトタイプとして存在するが、間に立つ仲介者として通訳者が取り持つものはAとBという二つの言語ではなく、AとBという異なった言語を話す個人やグループであると考えの方が妥当である（Pöchhacker 2004）。例えば、米国系企業の日本法人が、本社からの役員を迎えたとする。日本法人の社長が歓迎の辞を日本語で述べるのを英語に訳す通訳者は、「日本語」と「英語」を取り持っているのではなく、日本法人の社長ならびに彼（彼女）が代表する日本法人の利益や立場と、本社役員ならびに彼（彼女）が代表する本社の利益や立場を取り持つ役割を担わされるのである。

もちろん、通訳者の役割を、言語Aで言われたことを基本的にはそのまま言語Bにするという機械（*machine*）になぞらえる考え方（Knapp-Potthoff and Knapp 1986: 152）も一般的であり、人間としては捉えられない（*'non-human'*）中立的立場（*neutral*）な通訳者の立場というのも、通訳者が職業上行っている行為をより狭義にとらえた時には可能である（Pöchhacker 2004: 147）。通訳機械としての目に見えない（*invisible*）存在としての通訳者像は、もともと司法通訳の分野でつくられたものである（*ibid.*）。これは、そもそも法廷での証言を通訳者が通訳する際には、通訳された証言が伝聞以上のものになってはいけない事情ゆえに、通訳者は意味を取り扱ってはいけないとされ、言語上の翻訳（*verbatim translation*）だけをするべきであるという考え方に基づいている（Morris 1995, Pöchhacker 2004: 147 に引用）。しかしながら、Knapp-Potthoff and Knapp (1986) も Morris (1995) も、法廷での通訳者の役割は言語上のやりとり限定されず、社会文化的な複雑な側面も含まれるとし、たとえ法廷通訳の分野であっても、通訳者は、より可視化され、説明責任を負うべき立場のコミュニケーション仲介者（*a more visible and accountable communication facilitator*）として捉えられるべきであると主張した（Pöchhacker 2004: 148）。

実際に通訳してみると、異なった立場や異なった社会文化的背景を背負った人やグループの間に立つ通訳者は、しばしば話者の言ったことを別言語で表現するだけではすまなくなることもある。Jones (2002) は、本人の長年の通訳者の経験から、場合によっては、通訳者が積極的に必要な説明を足すようなことまでしないと、通訳つまりはコミュニケーション行為が成立しないこともあるとし、“*Interpreting is about communication*”（*ibid.*: 3）と明確にした後、特に文化的に異なった二者の間に入る通訳者は、そのギャップを埋める橋にならなくてはならない、と主張する。そも

そも通訳者がなぜ必要とされているか、という原点を、Jones は次のように言い切る。“... [t]he interpreter is called in to *explain* what each of the participants wishes to say in turn”（通訳者は、その場の参加者が互いに言おうとしていることを「説明する」ためにその場に呼ばれているのである）（Jones 2002: 4、イタリック原文のまま）。Jones の説にならえば、オリジナルの話者の話し方のスタイルも、話の中で使ったメタファーも、聞き手に対して十分な説明をするという目的をかなえるためであれば、その聞き手に合わせて適切なものに変えることが必要である際にはそうするのも通訳者の役割となる。そして、最終的にこの「説明をする」ということが言語上のメッセージの変換だけでは不可能な場合は、思い切った介入が必要となることもある。

In the more critical case of one party signaling a lack of understanding, the interpreter's mission of enabling communication is at stake and may require some form of mediating intervention.

(Pöchhacker 2004: 59)

コミュニケーションの参加者のどちらかが理解できていないことを明らかにした場合、つまり、コミュニケーションの成立が脅かされるような場合は、コミュニケーションを成り立たせるという通訳者の使命が危機にさらされている状態であり、間を取り持つための介入が必要となる場面がある。

話し手Aと聞き手Bとの間のコミュニケーションに調停者役として介入するという作業は、一般的にコミュニケーションの黒子役と考えられる通訳者の役割像からは離れているように感じられるかもしれない。しかし、コミュニケーションにおいて、言語の壁を乗り越える手伝いをするという通訳者の側面よりも、文化的な壁を乗り越える手伝いをする通訳者という側面に注目すると、通訳者とは cultural mediator（文化的仲介者）なのであるという定義（Kondo and Tebble 1997）が可能になる。そして、文化の仲介までも担う通訳者は、そもそも「聞き手の文化圏の常識・教養」を持つ個人でもあり、聞き手に話し手のメッセージを理解するだけの知識が欠けていると判断した場合には、それを補って表現することも求められる（ベルジュロ伊藤他 2009: 180）。例えば、皮肉やジョークは、話し手と聞き手の共有知識があって初めて成立するものであるが、応々にしてオリジナルのスピーチで使われた皮肉やジョークは聞き手にそのまま訳しても伝わらないことがある。そのような場合、語呂合わせの説明をしてジョークをジョークと捉えてもらえるようにしたり、言い回しや声の調子を工夫することで皮肉をそれととってもらえるようにする、などをするようになる。そこまで聞き手に合わせてもっとも効果的な話し方をするためには、通訳者は「優れた話し手としての能力」と役割も求められる（ibid.）。

また、殊に力のバランスが不均衡なグループの間にたって通訳をするとき、通訳者は文化仲介者（culture brokers）であったり弱者のための代弁者（advocates）でもあったりする（Drennann

and Swartz 1999, Pöchhacker 2004: 148 に引用)。以上のような見地から、通訳者は、その活躍分野や、たまたまその時に取り扱っているトピックによつての程度の差こそあれ、言語Aを言語Bに置き換えること以上の非常に大きな役割を、コミュニケーションにおいて担っていると言える。

5. まとめ

通訳者は、「意味」のイニシエーターにはならない（自分がオリジナル・スピーカーにならない）が故に、コミュニケーションの黒子であると言われる。また、「語学屋さん」「外国語の得意な人の仕事」といった、語学スキルに集中した評価のされかたも多い。しかし、通訳者は単に言語変換をしているだけではない。話し手によつてもともと発せられた「意味」を、与えられた文脈に沿って、蓄えておいた知識とその場で得られた知識を総動員して分析し、その分析結果（話し手が伝えようとしていること）を予測と照らし合わせつつ、聞き手に合わせて、第二の話し手として伝える通訳者は、実は、その場のコミュニケーションに最も積極的にかつ貪欲に関わっている参加者であるとも言えるのである。

References

- Anderson, R. B. W. 1976. "Perspectives on the Role of Interpreter" in Brislin (ed.), pp.208-228.
- ベルジュロ伊藤宏美、鶴田知佳子、内藤稔. 2009. 『よくわかる逐次通訳』東京外語大学出版会.
- Brislin, R. W. (ed.) 1976. *Translation: Applications and Research*. NY: Gardner Press.
- Chesterman, A. 1997. *Memes of Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Drennan, G. and L. Swartz 1999. "A concept over-burdened: Institutional roles for psychiatric interpreters in post-apartheid South Africa," *Interpreting* 4(2): 169-98.
- Gambier, Y., D. Gile and C. Taylor (eds.). 1997. *Conference Interpreting: Current Trend in Research*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Gile, D. 1995. *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gile, D. 2009. *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Revised edition. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Jones, R. 2002. *Conference Interpreting Explained*. 2nd edition. Manchester, UK: St. Jerome.
- Knapp-Pottholff and Knapp, 1986. "Interweaving Two Discourses - The Difficult Task of the Non-professional Interpreter" in J. House and S. Blum-Kulka (eds.), *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Gunter Narr. pp.151-68.
- Knapp-Pottholff and Knapp, 1987. "The man (or woman) in the middle: Discoursal aspects of non-professional interpreting." In K. Knapp and W. Enninger (eds.), *Analyzing Intercultural Communication*. The Hague: Mouton. pp.181-211.
- 小松達也. 2005. 『通訳の技術』研究社.
- Kondo, M. and H. Tebble, et al. 1997. "Intercultural communication, negotiation, and interpreting" in Gambier et al. (eds.) 1997, 149-166.

Morris, R. 1995. "The moral dilemma of court interpreting," *The Translator* 1(1): 25-46.

Pöchhacker, F. 2004. *Introducing Interpreting Studies*. London: Routledge.

Seleskovitch, D. 1978. *Interpreting for International Conferences*. Washington: Pen and Booth.

Wadensjö, C. 1998. *Interpreting as Interaction*. London/New York: Longman.

注

¹ 原文は英語であり、日本語翻訳は著者の責任によって行われた。また、これ以降、原文が英語である文献資料の日本語訳はすべて著者森住の責任において行われている。